

## 心的作用としての意志、努力、衝動の現象学的心理学

リップス、プフェンダー、シュタイン

中川 暖

### はじめに

わたしたちの内に具わっている様々な心的作用はどのように区別されるのであろうか。たとえば、わたしたちの心的作用には意志、切望、欲求、期待、願望、希望のようないくつもの働きがある。この様々な心的作用の中でも、特に「何かを意欲すること」と「何かを衝動的に欲求すること」はどのように区別されるのであろうか。具体例を挙げるならば、「私は走る」という意志をもとに走り出すこと、「私は突然走り出したい」という衝動に駆られて走り出すことの心的作用の在り方は何が違うのであろうか。

上記のような問題は、フッサール現象学の中では必ずしも取り組まれていなかった課題である。しかし、フッサールの弟子であったエディット・シュタインが執筆した『心理学と精神科学の哲学的基礎づけに関する寄与論稿<sup>1</sup>』第4章では、この問題を主題的に取り組んでいる。シュタインはフッサールの助手として『内的時間意識の現象学』や『イデー II』を編纂したことで有名な人物であるが、不思議なことに、彼女自身が執筆した衝動論では『イデー』期に開拓された「意志の現象学 (Phänomenologie des Willens)」の議論を直接的に参照することなしに、むしろ、1900年初頭の現象学運動で台頭してきたテオドル・リップスやアレクサンダー・プフェンダーといったミュンヘン現象学者たちによって提示された意志論を批判的に受容している。シュタインの衝動論を形成しているのは、ミュンヘン現象学者たちが共通基盤として使用していた広義の「意志 (Wollen)」の様式、すなわち、①「意志作用 (Willensakt)」、②人間の心的状態が何らかの対象に向かうという「傾向性 (Tendenz)」や「向き (Richtung)」を担っている「努力 (Streben/Erstreben)」、③心的状態の本能運動としての「衝動 (Trieb/Impuls)」を区別するという問題事象であった<sup>2</sup>。しかし、ミュンヘン現象学者たちによって提示された意志作用、努力、衝動の位置づけは、それぞれの現象学者によって異なり、同学派においても様々な議論の余地を残している。むしろ、この同学派内での意志の現象学に対する概念間の相違性こそが、シュタインの衝動論を読み解くためには重要な布石となっている。そのため本論文では、ミュンヘン現象学者たちによって提示された意志作用、努力、衝動概念の位置づけを整理しながら、シュタインがどのように彼らの議論を批判的に受容し、発展させることで自分自身

<sup>1</sup> ESGA6: 1918–1922、以下:『寄与論稿』を表示する。

<sup>2</sup> ESGA6: 53–54, Imhof, 1987: 199–217.

の衝動論を形成させたのかを再検討したいと思う。

本論文では、第一に、フッサールの助手として研究に従事していたはずのシュタインが自身の衝動論を形成する際に、なぜ意志の現象学に関するフッサールの議論を直接的に参照しなかったのかという問題について考察する（第1節）。第二に、ミュンヘン現象学者たちが受容したリップスの意志論を整理する（第2節）。第三に、シュタインが批判的に受容したプフェンダーの意志作用と努力の区別化という分析を取り上げることで、シュタインとプフェンダーの立場の差異点を明確にする（第3節）。第四に、これらの議論を踏まえて、シュタインが提示した衝動論の意図と主張を解明する（第4節）。

### 第1節：なぜシュタインはフッサールの意志の現象学を参照しなかったのか？

本節では、1916–1918年にフッサールの助手として研究に従事していたシュタインが衝動論を形成する際に、なぜフッサールによって提示された意志の現象学に関する議論を直接的に参照しなかったのかという問題について解明していきたい。この問題を明瞭にするためには、シュタインが影響を受けていたミュンヘン現象学者たちが思案していたフッサールの超越論的現象学批判というモチーフのもとで、フッサールの意志論を再検討する必要がある。

とはいえ、シュタインはフッサールの超越論的現象学という試みを完全に無視しているわけではない。この点に関しては、超越論的現象学が「心的なもの (Psyche, das Psychische)」を「意識 (Bewußtsein)」との相関関係に基づいて記述することであり、この現象学的記述の手法が、意識に規定された心的作用を記述する現象学的心理学にも適応されていたことをシュタインが指摘している点からも推察することができる。シュタインは現象学的心理学の方法論を『寄与論稿』の冒頭で以下のように述べている。

しかし、自然的態度の中で我々の眼差しが置かれている世界は、そして、そこに含まれているあらゆるものは共に、我々の意識との相関関係にある。——反省的考察ではそのように教えている。あらゆる対象とあらゆる対象の種類には、或る特定の意識連関が対応している。そして、逆に、もし或る特有の意識連関が生じているならば、この意識生活の主観には必然的に或る特有の対象性が現れる。このことは「意識における対象構成」の理論が述べていることである。構成する意識と構成される対象との連関はイデアールな法則性によって規定される。このような法則性の探求は、純粹超越論的現象学の課題である。その課題は、意識とその相関関係のすべてにある。これらの相関関係のひとつに、心理学の主観である心的なものがある。自然世界全体と同様に心的なものは統制された意識連関の中で構成されている<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> ESGA6: 9–10.

上記の引用は、シュタインが超越論的現象学という試みを適切に捉えて評価していることを表している。超越論的現象学では、純粹意識をあらゆる世界の存在に関係なく存在する絶対的存在に据えて、この意識を基点としてあらゆる世界が意識との相関関係とみなされる。このことは、超越論的現象学が超越論的意識を絶対的な基盤としていることを証明している。この一節から見て取れるのは、自然的世界と同様に、心理学によって従事されてきた心的なものが意識連関の中で捉え直されるという超越論的観念論の方法論に基づいて分析されてきたということである。これらを踏まえて、シュタインはフッサールによる超越論的現象学に倣い、意識構成の問題に基づいて解明される「事象そのものへ」接近する試みを採用し、心的なものを意識構成に限定された純粹な心的作用として探究する現象学的心理学の方法論を適切に捉えている。

ところが、シュタインにとってフッサールが提示した超越論的現象学は心的作用を説明するために必ずしも確実な道具立てではなかった。というのも、シュタインは、フッサールのように、心的なものを意識の相関関係とみなすことだけでは十全に心的なものを探究することはできず、むしろ、積極的に**意識の内在的な体験内容や構成要素には還元されない心的状態**を以下のような具体例に基づいて取り上げているからである。

疲労感とは私が何も知らずに（おそらく私の外見を通して他者に疲労感が露呈することはあるだろうが）ただ目の前にあるだけの可能性がある。興奮状態にあるときや、全身全霊で没頭して緊張している活動中では、私が自分自身をどのように感じているのかさえ全く意識していないかもしれない。そして、その緊張から解放されて、完全な疲労状態が訪れて、このことが完全に意識されたときに、はじめて私は疲労状態を意識の中に所与性としてもたらすことで、私にその緊張が不釣り合いなほど大きな負担を与えていたことに気づくことがある。そのような感じることをさえできない、「意識には現れてこない」状態は、もちろん、もはや意識状態、ないしは体験とはいえない。この状態は、体験に対して超越し、体験の中に告知されている（bekunden）にすぎない<sup>4</sup>。

ここで疲労感を具体例としてシュタインが主張しているのは、心的作用には意識には限定されない、いわゆる意識に表象および客観的に作用されない心的状態があるということである。この具体例に基づいて、彼女は心的状態を（1）意識の内在的な体験内容や構成要素に還元された「純粹意識および純粹自我の領域」【＝意識領域】と、（2）意識の内在的な体験内容や構成要素には限定されない「レアールな心的なものの領域」【＝生領域】を階層的に峻別するという試みを提示する<sup>5</sup>。この試みは、超越論的現象学において基点となった超越論的意識が絶対的存在として位置づけられてきたことに対する間接的な批判を示唆しているように思われる。というのも、フッサールの場合には、心的なものは意識との相関関係においてのみ心的作用とし

---

<sup>4</sup> ESGA6: 21.

<sup>5</sup> ESGA6: 21.

て措定されていたが、シュタインの場合には、意識に限定された心的状態は現象学が取り組むべき領域にとっては些か狭義であり、むしろ、意識体験には内在化されない「レアルな特性を持った自我の状態<sup>6</sup>」および「生命力 (Lebenskraft)」、特に、衝動論に着目すれば、「衝動力 (Triebkraft)」を意識よりも深い位相に据えて、人間にとってレアルな基盤となる心的なものの生領域を認めていたからである。シュタインによれば、「生命力とは徐々に使い果たされる有限の量子として我々に存在するのではなく、それ自体を流入と流出の中で維持するものとして我々に現われる<sup>7</sup>」ものであり、外的な印象や意識には依存せずにそれ自体で自動的に活動するメカニズムを具えている。こうして (1) (2) の枠組みは、シュタインが取り組んだ衝動論の形成にまで及んでいる。

ところで、フッサールが 1914 年の冬学期講義『倫理学と価値理論の根本的な問い』で提示した「意志の現象学」の特徴を整理するならば、以下の三点にまとめることができる<sup>8</sup>。1) 意志は意識という「志向性 (Intentionalität)」の構造として記述される心的作用である<sup>9</sup>。2) 意志は表象および客観化作用 (たとえば知覚作用) によって意識に現実化されるべき「行為意志 (Handlungswille)」として現れる<sup>10</sup>。3) 意志は将来に対する願望のような「価値づけ作用」や (現実化されるかどうかに関わらない) 将来を方向づける「決意意志」や「企図意志」からは区別される<sup>11</sup>。総じて、フッサールが提示した意志は意識の志向的構造によって記述されており、目的という対象意識に対して現実化されるべき行為意志の記述に留まっている。それに対して、シュタインは、もし生きた感情や生命力から引き起こされない活動的な意識に限定されてしまう意志概念があるならば、「志向的体験が生じない場合には、意志の可能性や意志を通して新しい生命力を発揮させる可能性が停止する<sup>12</sup>」と述べている。意志が志向的体験に限定される場合には、人間の行動には結びつかない生命力の所在を記述できないことを示している。この問題に対して、衝動概念では、志向的構造としてのみ記述された意志概念の問題点を克服する。

活発な生活から生じて、走り、飛び、踊ることで満足する、そのような運動したいという欲求、過剰な刺激状態から生じる運動欲求、「緊張」(もちろん、意識状態としてのみ理解されるのであるが)、常に新しい印象や関心を求めて急いで自分自身を開放する欲求である。それらはこのような状態によって純粋に因果的に理解される。我々はそれらを衝動 (Trieb) と呼びたいと思う。衝動に固有の方向性は、決して目的という対象意識に基づくも

---

<sup>6</sup> シュタインによれば、「レアルな特性を持った自我の状態」(ESGA6: 21) は、物質的な実在性や事物の事象内実とは区別される。ここでの「レアルな」という形容詞は意識には現れてこない、意識には内在的に還元されないという意味が含意されているであろう。

<sup>7</sup> ESGA6: 59.

<sup>8</sup> この点に関しては、稲垣 (2007) の研究が詳しく議論している。特に、フッサールにおける意志の現象学に関しては 41–48 頁を参照せよ。

<sup>9</sup> XXVIII: 108. 稲垣, 2007: 42–43.

<sup>10</sup> XXVIII: 106–109. 稲垣, 2007: 42–43.

<sup>11</sup> XXVIII: 109–125. 稲垣, 2007: 42–43.

<sup>12</sup> ESGA6: 77.

のではなく、現実的なあるいは充実の可能性の発見によってのみ決定される。ここでの衝動とは我々が衝撃によって特定の方向づけにボールが投げられる場合のように、単に駆り立てられるだけである。「駆り立てられた自我」は、もちろん、駆り立てられたものを意識化しているが、運動するボールと同じように、以前に掴んだ目的を目指して努力しているわけではない<sup>13</sup>。

シュタインにとって衝動概念は意志作用および努力とは区別される。衝動は目的をもって引き起こされたものでも、目的に沿って意識化された行動を引き起こすものでもなく、レアルな心的状態から生じて「駆り立てられたもの (Getriebenwerden)」にすぎない。彼女が問題化しているのは、意識体験に対してレアルな心的状態はどのように作用しているのかという問いである。ここで示される具体例は「強烈な衝動が私を「消耗させている」ならば、その結果として私の高揚感が喪失しているを感じる<sup>14</sup>」というものである。この具体例では、レアルな心的状態【衝動】から意識体験【高揚感】に対して引き起こされたメカニズムの変化が示されて、意識体験【高揚感】に内在化されないレアルな心的状態の内容【衝動の内容】が体験の中に告げ知らされている。目的という対象意識を持たない衝動を意識体験には内在化されないレアルな心的状態の作用として記述された。

シュタインはフッサールが提示した意志の現象学に関する議論を直接的に参照しなかった意図を明示してはいないが、心的なものを意識という志向的構造に内包されないレアルな心的状態として議論するために、超越論的現象学を採用した現象学的心理学という方法論に対して間接的に批判するというモチーフをもっていたとも考えられる。

## 第2節：リップスにおける意志、努力、衝動の位置づけ

本節では、シュタインの衝動論の基礎になった、リップスが提示した意志、努力、衝動という区別化構造を整理しながら、ミュンヘン現象学者たちが後に受容することになる意志の現象学の基盤を分析する。シュタインは「レアルな特性を持った自我の状態」という構造をリップスが執筆した『心理学原論』を中心に受容し、自然的世界の法則である「因果性 (Kausalität)」や精神的世界の法則である「動機づけ (Motivation)」という連関を意志、努力、衝動に関する議論にも適用する<sup>15</sup>。

『感覚、意志、思考について——心理学的草稿』では、広義の意味での意志と願望 (Wunsch) とは「活動的な努力 (aktives Streben)」と定義される<sup>16</sup>。知識に対して向けられた論理的な願望や意志は、对象的に規定されたものに「向かう (richten)」という性質を持つ活動的な努力を意

---

<sup>13</sup> ESGA6: 57.

<sup>14</sup> ESGA6: 77.

<sup>15</sup> ESGA6: 22.

<sup>16</sup> Lipps, 1902: 115.

味する。とはいえ、この意志は、何らかの目的を達成するための手段という努力の働きではなく、目的それ自体を方向づける努力の働きである。努力は「努力感情 (Strebungsgeföhle) <sup>17</sup>」ないしは「努力の感情 (Geföh! des Strebens) <sup>18</sup>」と定義されており、意志は感情の一種類に分類されている<sup>19</sup>。努力感情とは、何かに向けて「目指すこと (Abzielen)」や「指し示すこと (Hinzielen)」という目的に適った対象に向けられた心的なものの傾向性を意味し、目的を有した意志、切望、欲求、期待、憧憬、熟考、反省、願望、恐怖、希望の総称である。努力は「我々が直接的に体験するすべての心的作用<sup>20</sup>」であり、意志は心的作用の傾向性を意味している。

努力としての意志の位置づけは、意識体験から切り離されていない。意志は何らかの作用が遂行する際に目的として内在し、「私が何かを遂行する」際の意識体験には既に意志が内在するとも述べられている<sup>21</sup>。意識作用と意志作用には何らかの「経験的な連関性」がある。リップスが経験的な連関性を強調的に論じている具体的な場面は、「外部の事柄 (= 身体) に向けられた意志」あるいは「実践的意志 (Praktisches Wollen)」であり、これらは感覚や知覚という身体運動を条件づける努力である<sup>22</sup>。ところが、意志は身体運動の直接的な動機になることもあるが、たいていの場合には意志は私の身体状態に直接作用するのではなく、私の身体状態を変化させる意識体験に向けて (を媒介して) 作用している<sup>23</sup>。『心理学原論』では、努力の働きは「意識体験の根底<sup>24</sup>」を成す「レアルなもの (Realität)」としての心的状態から意識体験に対して方向づけられた心的作用とみなされる。『感覚、意志、思考について』では、意識と意志の連関は「努力の引き起こし (Erregen)」において分析される。意志は意識と特定の意識体験は意志から方向づけられた努力を通して引き起こされる。

『心理学原論』では、意識に対する努力の働きは心理学の術語を用いた「抵抗 (Widerstreben) <sup>25</sup>」という努力によって説明される。努力感情には、何かに向かう努力と、その努力に抗うという意味での「抵抗の努力」という二項対立した要素が含意される。リップスは、この対立を「積極的努力」と「消極的努力」、「能動的努力」と「受動的努力」、「顕在的努力」と「潜在的努力」という二項対立の構図において説明する。「明日は雨が降らなければいい」と願う、あるいは、「雨が降るであろう」と思惟しながらも「雨が降ってほしくない」と願うのは、内的に「抵抗」する努力が「雨が降る」という直接的に思惟された意識体験に抗うこと、「雨が降らなければいい」という抵抗する努力が、意識体験に対して反抗的に働くことによって可能になる

---

<sup>17</sup> Lipps, 1902: 17.

<sup>18</sup> Lipps, 1902: 19.

<sup>19</sup> 意志は努力感情として説明されており、一貫した立場を取っている (Lipps, 1902: 19; Lipps, 1909: 258)。後に指摘するように、この定義に関してはプフェンダーにおける意志の位置づけと一致している (Pfänder, 1900: 12)。

<sup>20</sup> Lipps, 1902: 19.

<sup>21</sup> Lipps, 1902: 116.

<sup>22</sup> Lipps, 1902: 116–119.

<sup>23</sup> Lipps, 1902: 117.

<sup>24</sup> Lipps, 1909: 258.

<sup>25</sup> Lipps, 1909: 261.

26. この具体例では、意識に向けられた既存の努力が顕在的に働くのに対して、抵抗は既存の努力に抗うことで、抵抗する努力が意識体験に対して潜在的に働いていることが示される。人間の努力感情は二つの動性、すなわち、顕在的努力——既存の努力——の感情と、潜在的な努力——抵抗という努力——の感情との間を揺れ動いているともいえる<sup>27</sup>。この具体例は、四段階によって説明できる。

1. 明日は外出する用事があり、「外出したい」という願い(=既存の努力)を抱いている。
2. 「明日は雨が降る」という事実を天気予報で知る。
3. 「明日は雨が降るであろう」という直接的に思惟された意識体験が引き起こされる。
4. 「明日は雨が降るであろう」という意識体験に対して、「雨が降らなければいい」という抵抗する努力(=抵抗の努力)が反抗的に働く。

したがって、意識と意志は既存の努力と抵抗の努力の相反する働きによって関係づけられている。意志とは「目的活動(Zwecktätigkeit)」を行うために意識体験を方向づける心的運動であり、この意志作用は「内面的な意志行動(innere Willenshandlung)<sup>28</sup>」である。内面的な意志行動とは、意志が意識体験に影響を与える作用であり、意志によって目的に到達するために新しい努力が作られるという働きである。そして、この努力が目的に対して傾くことで、努力感情は「意識的な努力(Bewußtes Streben)」になり、その努力により意識体験が基礎づけられる。意識と意志による経験的連関性は目的と手段の連関であり、動機づけ連関である<sup>29</sup>。他方で、意志作用から直接的に引き起こされた身体活動を「衝動(Trieb)」の感情とみなし、衝動は意志作用や努力のような努力感情とは区別される<sup>30</sup>。衝動は「本能運動(Instinktbeziehung)<sup>31</sup>」であり、意志作用から直接的に引き起こされた身体活動は「外面的な意志行動(äußere Willenshandlung)<sup>32</sup>」である。外面的な意志行動とは、意志が直接的に身体活動に影響を与え、神経の反射において特定の身体活動が引き起こされる作用である<sup>33</sup>。この点において衝動によって引き起こされた身体活動は動機づけではなく、目的を持つことのない因果連関において解釈される<sup>34</sup>。したがって、心的作用が意識体験あるいは身体活動のどちらに対して働きかけるのかによって努力と衝動は区別される。しかし、意志が判断した結果として引き起こされた心的作用なのか、何らかの対象から引き起こされて生じた心的作用なのかを区別することは困難である。

---

<sup>26</sup> Lipps, 1909: 260–261.

<sup>27</sup> Lipps, 1909: 261.

<sup>28</sup> Lipps, 1909: 303.

<sup>29</sup> Lipps, 1909: 296–303.

<sup>30</sup> Lipps, 1909: 308.

<sup>31</sup> Lipps, 1909: 311.

<sup>32</sup> Lipps, 1909: 308.

<sup>33</sup> Lipps, 1909: 308.

<sup>34</sup> Lipps, 1909: 308.

### 第3節：プフェンダーにおける意志作用と努力の区別化という問題

本節では、シュタインが自説の構築に際して参照軸としている立場であるプフェンダーが『動機と動機づけ』において提示した意志作用と努力の区別化という問題を取り上げながら、シュタインとプフェンダーの努力の位置づけを巡る立場の差異点を明確にする。シュタインはプフェンダーが努力に(1)「目的意識」を認めていない点と、(2)「動機(および動機づけ)」を認めていない点を批判している。そして、(3)プフェンダーが提示した意志作用と努力の区別化という問題の曖昧さをシュタインがどのように再検討しているのかを分析しよう。

#### (1) 目的意識を持たない努力と目的意識を持つ努力の対峙

目的意識を持たない「衝動的な努力(Treibendes Streben)」の特徴は、二つの努力の引き起こしという作用によって説明される。第一に、「遠心的な努力(zentrifuges Streben)<sup>35</sup>」である。「食べ物を知覚して、その知覚された食べ物を食べたい」という欲求がある。その場合には、まずは食べ物を知覚するための対象意識が存在しており、その後、遠心的な運動としての努力が対象へと向けて働く<sup>36</sup>。それに対して、第二に、「求心的な努力(zentripetales Streben)<sup>37</sup>」である。「空腹を満たしたい」という努力が引き起こされた場合には、この空腹を満たしたいという努力は対象意識から自我に向けて求心的に引き起こされた努力といえる。努力とは、1) 遠心的に方向づけられる対象意識から引き起こされるか、2) 求心的に方向づけられる努力それ自体の引き起こしに由来するかのどちらかであり、求心的な方向づけの努力は、必然的に自我の中から遠心的な努力を引き起こさせると述べられる<sup>38</sup>。とはいえ、努力とは「それ自体が盲目であり、それ自体が特定の目的を意識せず、必ずしもそのような意識を自分自身の中に含んでいるわけではない<sup>39</sup>」。すなわち、「空腹を満たすために食べ物を食べたい」という努力が決して自我から明確な目的意識をもって引き起こされたものではなく、単に知覚された対象から自我に向けられた「誘惑(Verführung)」および「刺激(Reiz)」を通して因果的に引き起こされたにすぎない<sup>40</sup>。それに対して、意志作用は自我が判断した行動、すなわち、何かをするかしないかという「計画的な意識(Projektsbewußtsein)<sup>41</sup>」および「当為的な意識(Sollens-bewußtsein)<sup>42</sup>」を通して将来的な行動を決定しているという点で対象についての目的意識を含んでいる。意志作用は、自我の中心および、心的なものを超えた「精神的な傾聴(geistiges Hinhören)<sup>43</sup>」から生じた特定の意図を自分自身が判断して選択するために動機づけられている。したがって、努

<sup>35</sup> Pfänder, 1911: 128.

<sup>36</sup> Pfänder, 1911: 128.

<sup>37</sup> Pfänder, 1911: 129.

<sup>38</sup> Pfänder, 1911: 129–130.

<sup>39</sup> Pfänder, 1911: 129.

<sup>40</sup> Pfänder, 1911: 140.

<sup>41</sup> Pfänder, 1911: 135.

<sup>42</sup> Pfänder, 1911: 135.

<sup>43</sup> Pfänder, 1911: 142, 145, 146.

力は「自我の周縁（身体）」、意志作用は「自我の中心（精神）」において引き起こされるという点で両者は区別される<sup>44</sup>。

シュタインは目的意識を持たない衝動的な努力から衝動という要素を切り離して努力の在り方を再検討している。努力とは「私は知識を獲得するために努力したい、または努力するつもりである<sup>45</sup>」のように、何かを獲得するために開始される心的作用のことである。シュタインによれば、「衝動という意味での努力は、私の中でのみ目覚めることができるが、しかし、意志されておらず、自由に実行されてもいない。努力は私の作用ではなく、私に与えられたものである<sup>46</sup>」。この努力は、プフェンダーが提示した対象を獲得するものに向けられた「衝動の意味を含意した努力<sup>47</sup>」の定義と一致する<sup>48</sup>。それに対して、目的意識を持つ努力は以下のように定義される。

たとえば、ハイキングについて話しているが、私に「聞く耳を立てさせる」何か、私の内部に触れる何かがあり、私がそれを「傾聴」し、そのことに自分自身を開くならば、それは「刺激」や「誘惑」として私に現われる。私はこの誘惑に自分自身を閉ざすのではなく、むしろ、この誘惑に自分自身を委ねて、自分自身の中にその身を委ねる。その歓喜、すなわち、おそらくハイキングが楽しみであるという「味わい」が自分自身の中に流れ込んでくることで、実際に体験してみたいという欲求が目覚めるのである。それは変化による努力である<sup>49</sup>。

ここでシュタインが主張したかったことは、プフェンダーが意図的に区別した目的意識の有無によって意志作用と努力を区別する試みはほとんど差異がないのではないかということであろう<sup>50</sup>。プフェンダーは、精神的な傾聴を通して判断された動機である限りで意志作用とみなすが、シュタインは、純粋に対象に基づいている努力にも精神的な傾聴が潜在的に働いているとみなす。というのも、「この努力は私が何を求めて努力しているのか」という考えと、この誘惑のため、その誘惑的な性格のために、その誘惑に身を委ねることに基づいて〔努力は〕私の中

<sup>44</sup> Pfänder, 1911: 133, 148.

<sup>45</sup> ESGA6: 53–54.

<sup>46</sup> ESGA6: 54.

<sup>47</sup> ESGA6: 54.

<sup>48</sup> プフェンダーは努力に対象に対する意識を含まないのに対して、或る特定の条件下では、シュタインは努力に対象に対する意識を含むことを認めている (Imhof, 1987: 200)。

<sup>49</sup> ESGA6: 60.

<sup>50</sup> 他方で、シュタインは努力を（ヒルデブラントから受容した）「態度表明 (Stellungnahmen)」と同じ次元で解釈している。しかし、以下の二つの点から努力と態度表明は区別される。第一に、「私は努力を無効にするだけではなく、努力を無効にすれば努力を止めることができない」(ESGA6: 54)。態度表明は、態度に示すか示さないかどうかを（意志とは無関係に）選択できるが、努力を自分自身の中で有効にするか無効にするかどうかは自由に選択することはできない (Imhof, 1987: 200)。というのも、努力は環境状態や別の努力によって引き起こされたものだからである。第二に、努力から客観的な根拠（既存の十分に根拠づけられた態度表明）を捨象しても「現象的な源泉」（自我の感情状態）を遮断することにはならない (ESGA6: 54)。シュタインはプフェンダーが述べたところの「現象的な源泉」を生状態の位相において考えている。

に生じる<sup>51</sup>」からである。努力を引き起こした誘惑にもそれ自身に身を委ねるかどうかという自我の判断が潜在的に関与しているといえる。知覚された対象から誘惑および刺激を受け取った場合でも、やはり自我の特定の判断や選択を実践的に行う精神的な傾聴が関与しているはずだという主張である。シュタインはプフェンダーよりも努力の範囲を拡張しているといえる<sup>52</sup>。

## (2) 努力の因果連関と努力の動機づけの対峙

プフェンダーは意志作用を動機づけ連関に、努力を因果連関に図式的に位置づける。意志作用と努力が人間の心の中でどのように作用しているのかを検討してみよう。人間の意志作用が意図した計画を実行する際には、追加される別の意図や既存の計画に抵抗するための複数の努力が同じ人間の心の中に内在する可能性がある。プフェンダーは「意志作用の実行に際した努力の影響関係<sup>53</sup>」を分析することで、自我の中に存在している複数の努力が意志作用の実行に直接影響を与える可能性を検討している。努力と意志作用の実行関係は、「現象的な影響関係<sup>54</sup>」である。自我の中にある複数の努力の中には特定の意志作用を実行に導く働きがあり、特定の努力が意志作用の実行を導き出すための原因になる可能性がある。たとえば、「その花は美しくない。しかし、私は単に花が欲しいという欲求に誘惑されて花を買った<sup>55</sup>」という具体例では、努力①【その花は美しくない】は意志作用【花を買う】を引き起こさせる誘惑的な原因にはなりえず、他方で、努力②【単に花が欲しい】は、自我を誘惑するように因果的に引き起こされるために、この花は「現象的な原因」になる<sup>56</sup>。しかし、努力①②は、意志作用によって行為が遂行されるような【<入院している友人に花を渡すべきだから>花を買う】に対して、行為の意図的な規定をもたらず動機にはならない。努力という原因は、意志作用の実行に対して——努力は何らかの意図を含意した直前の動機を与えたわけではなく——現象的に（意識に）現れているにすぎないからである<sup>57</sup>。プフェンダーの見解では、努力が意図を持たない欲求であるために、意志作用を引き起こす現象的な原因に留まり、行為遂行に対して明示的な動機にはなり得ない。それに対して、意志作用【<入院している友人に花を渡すべきだから>】は、実践的な行為遂行に向けて、自我の中心から生じる精神的な傾聴を通して選択して判断した意図的な動機を環境や別の努力の働きには邪魔されずに自由に作用させることができる。

とはいえ、シュタインはプフェンダーが提示した意志作用を動機づけ連関に、努力を因果連関に位置づける図式化を排斥し、努力の動機づけに関して模索している。ここで重要なことは、

<sup>51</sup> ESGA6: 60.

<sup>52</sup> Imhof (1987) の研究では、求心的な努力と遠心的な努力の差別化を、「コギトの形式」と「その背景体験」に対応し、両者はいずれも純粹自我の体験様式にすぎないことが示される (Imhof, 1987: 205)。努力が自我の身体から引き起こされたものであったとしても、結局のところ、その身体も純粹自我の意識（自我の中心）から構成されるために、両者は自我の中心に依存しているにすぎないという指摘である。

<sup>53</sup> Pfänder, 1911: 139.

<sup>54</sup> Pfänder, 1911: 140.

<sup>55</sup> Pfänder, 1911: 140.

<sup>56</sup> Pfänder, 1911: 140.

<sup>57</sup> Pfänder, 1911: 140.

シュタインがプフェンダーの動機づけを単に批判したのではなく、意志作用と努力による動機づけ連関の様式が異なることを主張している点である。

シュタインによれば、「一般的な意味での動機づけとは、一般に作用が相互に結びつく結合 (Verbindung) である。〔…〕一方が他方から生じること (Hervorgehen)、一方が他方に基づいて、他方のために引き起こすこと (Sichvollziehen) あるいは引き起こされること (Vollziehenwerden) である<sup>58</sup>」。動機づけは知覚、感情、信念の体験にも拡張されるために<sup>59</sup>、動機づけ連関が適用される領域がプフェンダーよりも広がっている<sup>60</sup>。動機づけが一方の体験から他方の体験を「引き起こさせる」という意味であるならば、努力という心的作用にも動機づけ概念は適用できるであろう。シュタインは1) 動機づけに刺激や誘惑を含める場合と、2) 動機づけから刺激や誘惑を切り離す場合の二つの様式について指摘している。1) の動機づけに関しては以下のようになる。「私が誘惑に駆られてハイキングに行く」という場合には、外的な刺激や誘惑に駆られて引き起こされた努力が理性的に正当化されていないだけであり、外的な刺激や誘惑に駆られた体験は、当該の努力がその体験を構成する内容になっているために動機づけられているといえる。2) の動機づけに関しては以下のようになる。「相手の善行にはその相手に対して感謝の意を表したい」という場合には、「感謝の意を表したい」という体験内容は合理的に正当化されるために、理性的に動機づけられている。シュタインはプフェンダーが努力に対して行動の動機を認めていないことを暗示的に批判し、努力が体験内容になり得るために、すなわち何らかの体験を引き起こさせることができるために、努力は「自我が体験を有するだけではなく、体験の支配者 (Herr) として現れる<sup>61</sup>」自由作用であることを認めている<sup>62</sup>。シュタインは、努力が意志作用のように理性的に動機づけられていることを指摘するのではなく、動機づけ連関を自分自身が自由に合理的な意図を実行することができる意志作用にのみ限定することが不要であると考えている。

### (3) 意志作用の因果性と動機づけ

シュタインは意志作用と努力の区別化を以下の三つの点から整理している。

1. 意志は、それ自体によって実現されるべき行動を動機づける。努力は、実現されるべき行動を〔因果的に〕引き起こさせるだけである。
2. 努力は如何なる意図も持ちえない。

---

<sup>58</sup> ESGA6: 36.

<sup>59</sup> ESGA6: 35.

<sup>60</sup> Uemura & Salice (2019) の研究では、シュタインの動機づけ概念を「或る種の非因果的な「なぜ」という問いが適用可能なあらゆる種類の体験において、動機づけについて適切に語ることができる」(Uemura & Salice, 2019: 142–143) と評価しており、一方の体験と他方の体験が「なぜ？」という仕方で結びけられるならば動機づけ連関を認めていると解釈している。

<sup>61</sup> ESGA6: 46.

<sup>62</sup> ESGA6: 62, Imhof, 1987: 207.

3. 努力による行動の開始は意志とは異なる。すなわち、意志は、実行した行動の動機になり得るが、衝動的な努力は、目的に向かって実行する行動を〔因果的に〕引き起こさせるだけに留まり、衝動は行動の動機にはなり得ない<sup>63</sup>。

この三つの特徴はプフェンダー解釈としては妥当であるように思われる。このプフェンダー解釈に対してシュタインは、目的意識を持った努力と努力の動機づけの可能性を再検討していた。この点は、プフェンダーが提示した意志作用の位置づけにも影響を及ぼすことになる。プフェンダーが提示した議論では、意志作用は、「意志作用を実行するとき、自我は自分自身に特定の行動、すなわち、何かをするか何かをしないかを設定する<sup>64</sup>」ことができる。意志作用は、「実践的な計画」を遂行するために、自我の中心を起点にして自分自身の将来の行動を規定できる自由作用であった。その場合には、意志作用によって実行された行動は「何を為すべきか」という精神的な要求に応答することによって理性的に動機づけられている<sup>65</sup>。それに対して、シュタインは、意志作用が「自我の始まりの出来事の起点として現れている<sup>66</sup>」こと、意識の志向的構造に限定された意志作用の分析に留まっていることを疑問視する。プフェンダーの場合には、意志作用のみに認められる動機は、実践的な意図が自我の中心（＝精神）から自由に導き出されることに由来しているが、シュタインの場合には、自我の中心は決して意志作用ではなく、レアルな心的状態が現れる生命力の流れである。シュタインによれば、「私は意志によって高揚感を生み出したり、疲労感を抑制させたりはできない。意志は自由作用ではなく、自然に生じる状態だからである<sup>67</sup>」。この引用で示されているのは、自我の中心となる生命力から引き起こされる意志作用が、生命力の増加および減少によって因果的に変化する可能性である。プフェンダーは動機を、自我の中心から導き出された意志作用を通して実行された行動の意図（理由・根拠）と解釈することで、意志作用を動機づけ連関に位置づけた。それに対して、シュタインはそもそも意志作用を自我の中心から導き出される作用ではなく、自我の中心となる生命力が直接的に影響を与えることで、生命力から引き起こされる意志作用が因果連関の中に位置づけられる可能性を考慮していた。他方で、意志作用とは、人が自由な意図をもって行動を実行させる働きであるが、その意志作用の動機は生命力に必然的に基づいている。生命力には行動を開始させるために必要な意志作用に力を与える働きがあり、その力が意志作用を行動に変換させることで、行動の動機になるとも説明される<sup>68</sup>。

#### 第4節：シュタインにおける衝動論

---

<sup>63</sup> ESGA6: 62.

<sup>64</sup> Pfänder, 1911: 135.

<sup>65</sup> Pfänder, 1911: 142.

<sup>66</sup> ESGA6: 77.

<sup>67</sup> ESGA6: 77.

<sup>68</sup> ESGA6: 159.

本節では、ミュンヘン現象学者たちの意志、努力、衝動を批判的に受容したシュタインの衝動論を再検討したい。シュタインは衝動的な努力から衝動という要素を切り離して努力そのものの在り方を再検討していた。その際に取り残された衝動構造を衝動メカニズムとして捉える。第一に、衝動的な努力に関する因果的なメカニズムである。第二に、シュタインが記述したレアルな衝動と生命力の流れに関する生活動メカニズムである。

第一に、衝動的な努力は「激しい欲求 (Drang)」である。自我の中でのみ目覚めることができる。衝動は外的印象や知覚された対象のように、自我に対して与えられたものから生じてくる。衝動は意志作用のように努力を肯定するか否定するか、自分の中で実践的な意図を発揮させるか拒むかを自分自身が選択することができる自由作用からは区別されてきた<sup>69</sup>。シュタインは、プフェンダーが提示した衝動構造を因果的なメカニズムに沿った「動機づけのない努力<sup>70</sup>」と定義し、衝動を活気から生じてきた欲求、過剰な状態から生じた運動欲求、意識状態としての緊張、常に新しい印象や関心を求めている状態とみなしている。衝動は純粋にレアルな因果性であり、対象的な目的意識に基づくものではない。というのも、衝動とは押し出すことで特定の方向に向けられるボールと同じように、単に外部に向けて駆り立てられるものだからである<sup>71</sup>。「食べ物を食べたい」という衝動体験の因果的なメカニズムは以下のように説明できる。

1. 食べ物を対象として知覚する。
2. 食べ物から自分自身の衝動が引き起こされる。
3. この衝動は自我に対して「その食べ物を食べたい」という努力を働かせる。
4. 「食べ物を食べたい」という衝動的な努力が因果的に実行されて行動になる。

この衝動体験の因果メカニズムでは、意識体験としての衝動と努力としての衝動構造の間の関連性が説明されている。私が食べ物を食べたいという願望を持つことは、その願望の現象的な原因となっているもの——食べたいという衝動を引き起こさせる食べ物——から因果的に引き起こされたにすぎない。その場合に、衝動的な努力は自我の意識状態 (= 志向的構造) に告知された心的作用となる。

第二に、努力から切り離された「レアルな衝動<sup>72</sup>」は、知覚された対象や自我 (= 主観) から影響を受けない生命力の流入と流出運動の相互作用によって関係づけられており、生命力の量が枯渇することによって引き起こされる「欲求衝動 (Bedürfnistriebe) <sup>73</sup>」と、生命力の量が満杯になることによって引き起こされる「活動衝動 (Betätigungstriebe) <sup>74</sup>」という生活動の推移を通して説明される。

---

<sup>69</sup> ESGA6: 54.

<sup>70</sup> ESGA6: 57.

<sup>71</sup> ESGA6: 57.

<sup>72</sup> ESGA6: 58.

<sup>73</sup> ESGA6: 59.

<sup>74</sup> ESGA6: 59.

この私の「存在状態」の変化では、生命力の現象が当然のこととして私に引き起こされて、生命力が顕在的な生活動（Lebensbetätigung）に変換される。この生活動の構造は、データの受信とは異なる。我々はここで生活動の構造が自我の異他的な体験ではなく、自我の体験内容であり、体験それ自体の中に、同様に、心的な性質としてのレアールな状態を持つことを理解する。レアールな衝動は、特定の方向づけに流れ出る切り離された量子として現れて、この流れはそれぞれが与えられたものである限りで衝動体験の内容（おそらく、その行動への実行）を形成する。特定の心的な能力の発達に対応する衝動を維持するための生命力の「供給（Bereitstellen）」はない。それぞれの心的な能力は、生命力の直接的な実行である。衝動における生命力の流れを抑制するものは全くないし、それに対して、その流れを止める主観の能力はもはや因果的なメカニズムからだけでは理解できない<sup>75</sup>。

ここで示されたのは、行動を目的として引き起こされる衝動ではなく、主観の状態を目的としてそれを根拠づけるレアールな衝動構造である。レアールな衝動は、生命力の量子の増加（＝活動衝動）と減少（＝欲求衝動）の流れが意識体験の所与性である限りで衝動体験の内容を形成する。意識と意識流の連関によって意識体験が構成されているように、レアールな衝動と生命力の流れは人間の内奥から湧き出るような生活動を構成している。自我状態の現象的な源泉である疲労感から高揚感への移行は以下のような心理メカニズムにおいて説明される。

1. 私の身体や意識にはいまだ現れていないような疲労感が続いている。
2. 生命力の低下および生命力が枯渇することで欲求衝動が自分自身の内奥から引き起こされる。生命力が低下し枯渇することで自分自身の中に別の外的な印象を吸収し、それによって、望ましい状態をもたらそうとする衝動が引き起こされる。
3. そのときに、外的な印象を遮断し、心が静まれば欲求衝動は喪失する。
4. 新しい生命力を補いたいという既存の衝動を補完しようとする衝動が引き起こされることで、疲労感の喪失、そして、最終的には新しい高揚感への移行に反映される。
5. その結果として、生命力が満たされることで、前向きな活動衝動が告知される。
6. 生命力の流れ【欲求衝動・活動衝動】は衝動体験の内容【意識体験の内容】を形成する。

このレアールな衝動による生活動メカニズムでは、レアールな衝動【欲求衝動・活動衝動】が衝動体験の内容【意識体験の内容】を形成する過程が説明される。シュタインが提示した衝動論では、因果的なメカニズム【衝動体験】と生活動メカニズム【欲求衝動・活動衝動】を統一的に捉えることで、人間の意志に関するメカニズム全体を捉える。

---

<sup>75</sup> ESGA6: 58.

## おわりに

本論文では、心的作用としての意志、努力、衝動の位置づけをミュンヘン現象学者たちの議論を通して分析した。シュタインが開拓した衝動論は、フッサール、リップス、プフェンダーによる意志の現象学の系譜を批判的に受容しながらも、独自の問題事象を確立している。シュタインは意志、努力、衝動を「レアルな衝動→努力→意志作用」の触発段階モデルとして捉えることで、人間の意志に関するメカニズム全体を現象学的に論じていた。

フッサールは意志を意識の志向的構造によって記述し、目的意識に対して現実化されるべき行為意志の記述を分析することに留まっていたため、目的意識を持たない衝動に関しては議論できなかった。リップスは、意識体験に働きかけるレアルな心的状態としての意志を提示し、意識体験と意志を努力によって連関づけた。しかし、意志作用としての努力と衝動の相違点は、両者が意識体験あるいは身体活動に対して働きかけるのかによって区別されるにすぎなかった。こうして努力と衝動は同じ次元に位置づけられていた。プフェンダーは、意志作用と努力を動機づけ連関と因果連関に明確に区別した。衝動的な努力は対象的な目的意識に基づくものではないが、知覚された対象の誘惑や刺激から因果的に引き起こされた心的作用であったために、自我の意識状態に還元される限りでの心的作用を記述したにすぎなかった。これらの議論を踏まえて、シュタインはレアルな衝動を外的印象による刺激や誘惑によって引き起こされる衝動的な努力から区別し、意識体験には内在化されない生活動メカニズムとして捉えていた。そうすることで、意識体験に内在化されないレアルな心的状態から発揮される生命力の流れを人間の内奥から湧き出るレアルな衝動として記述することが可能になった。

本論文では、フッサールに代表される意志を意識の志向的構造によって記述する現象学に対して、初期現象学に代表される意識の志向的構造には還元されない意志論を再検討することで、意志、努力、衝動の位置づけを明確にした。今後の展望は意志、努力、衝動という心的作用がどのように特定の行為を惹き起こさせるのかを現代行為論を紐解きながら解明することである。

## 参考文献

- Husserl, Edmund. (1988). *Vorlesungen Über Ethik und Wertlehre 1908–1914. Vorlesungen über Grunderagen der Ethik und wertlehre 1914*. Husserliana XXVIII. Dordrecht: Springer. SS. 1–159.
- Imhof, Beat. (1987). *Edith Steins phiosophische Entwicklung; Leben und Werk*. Basel: Springer Basel AG.
- Lipps, Theodor. (1901). *Das Selbstbewusstsein; Empfindung und Gefühl*. Wiesbaden: Bergmann.
- Lipps, Theodor. (1902). *Vom Fühlen, Wollen und Denken*. Leipzig: J. A. Barth.
- Lipps, Theodor. (1909). *Leitfaden der Psychologie*. 3<sup>st</sup> Edition. Leipzig: Wilhelm Engelmann.
- Pfänder, Alexander. (1963). *Phänomenologie des Wollens: eine psychologische Analyse; Motive und Motivation*. München: J.A.Barth. SS. 123–156.
- Stein, Edith. (2010). *Beiträge zur philosophischen Begründung der Psychologie und der*

- Geisteswissenschaften*. ESGA6. Freiburg: Herder.
- Uemura, Genki & Yaegashi, Toru. (2012). Chapter VIII: Alexander Pfänder on the Intentionality of Willing. *Intentionality: Historical and Systematic Perspectives*. Basic Philosophical Concepts. Munich: Philosophia. pp. 243–274.
- Uemura, Genki & Salice, Alessandro. (2019). Motive in Experience: Pfänder, Geiger, and Stein, *Phenomenology and Experience: New Perspectives*. Nederland: Koninklijke Brill NV. pp. 129–149.
- Uemura, Genki. (2020). Alexander Pfänder’s Phenomenology of Motivation. *The Routledge Handbook of Phenomenology of Agency*. 1<sup>st</sup> Edition. England: Routledge. pp. 29–40.
- 稲垣諭. (2007). 『衝動の現象学——フッサール現象学における衝動および感情の位置づけ』 . 知泉書館.
- 八重樫徹. (2009). 「行為、因果、責任：フッサールとプフェンダーの「動機付け」概念を巡って」, 『フッサール研究』, 7, 24–36.